



巻 頭 言

山 田 勝
(日本ワイルド協会会長)

映画『オスカー・ワイルド』が日本でも封切られ、ようやく真剣な目でワイルドを見る気運が熟してきたように思われる。我々オスカー・ワイルド研究に従事する者にとっては、現在のブームは部分的には歓迎すべきことである。しかしブームというものは、いずれ衰退するものと考えておかねばならない。研究者はあくまでも研究者であり、学問の永続的發展と研究の成果を後世に伝える義務があることを常に念頭においておくべきだろう。

没百年も迫っている。イベントもあることは確かだ。だが、それは単なる通過点にすぎず、一種のお祭りである。祭りというものは、農業を例にとれば、土作り、種蒔き、手入れ、収穫、そしてその後に満足感を体現するものである。没百年祭にしても、ワイルド研究のプロセスでは、ただの祭りであることには違いない。それ以降が重要なのである。『オスカー・ワイルド事典』の刊行も没百年以降の研究の刺激材料として刊行されたものである。1995年に関係者が集まり、事典刊行のスタートを切ったとき、誰も映画のことは口にしなかった。少なくとも私は、そのような映画が計画されていることも知らなかった。つまり、我々はワイルド・ブームを意識せずに、恒久的ワイルド研究の基礎固めと、それまでの研究成果を一つの集合体にするという目的で、あの「事典」に臨んだのである。今後ともその基本姿勢を忘れないようにしたい。

この「ニューズ・レター」は今回が最終号となる。これまで続いたのはすごいことであり、初期ワイルド協会の先生方に心からの敬意を表したい。しかし将来の研究、そして若手の研究者を養成するには、「ニューズ・レター」を発展させた様式である論文集の方に傾くことになったのも、21世紀を視野に入れたものであった。「ニューズ・レター」に愛着とノスタルジアを感じる方々も多いであろうが、その点は十分御理解いただければと思っている。

最終号の巻頭に際して、また私の性格からして堅苦しいことを書いたが、これまでワイルド研究をし、時にはワイルドを研究対象にしたことで、嫌な思いをしたこともあったので、ついこのようになってしまったのだ。

映画『オスカー・ワイルド』は評判どおりいい映画だった。人間が根源的に持つ「純粹の愛」とは何かについて、現代人に問いかけている。ワイルドの愛と美意識は一つの時代を超えている。ヴィクトリア時代の道徳的偏見がワイルドを没落させたが、ワイルドはそ

れを没落とは考えない。「美と愛の殉教者」となりえたことへの満足感すらあったのではないだろうか。『わがままな巨人』（それはヴィクトリア時代の巨大な偏見である）をキーにしたワイルドの多様な愛の様式美をこの映画が教えてくれたのだ。ただ、我々日本のワイルド研究家の目からすれば、イギリス人のワイルドへの謝罪の気持ちも伝わってきたことは少々興味深い。

この映画は研究者にも刺激を与えてくれたことは事実である。ニュー・クリティシズム的にワイルドの作品分析だけで、ワイルドの完全理解は難しいということである。ワイルドはもともと作家になるつもりはなかった。ポー・ブランメルのようなダンディな姿で、生活美学のあり方を、産業革命の進行した「醜悪な時代」の人々に説く講演家になりたかったのだ。いわば彼はペンで紙の上に文字を連ねることによる芸術家になるよりも、自身をキャンパスにした壮大な芸術作品を描こうとしていた。その意味でワイルドの作品は、彼の創造した「自分という芸術作品」の副産物ということになる。今さらニュー・ヒストリシズムがどうの、というつもりはないが、この映画はワイルドの作品のみならず、ワイルド自身、そして彼をとりまく時代環境を知ることの重要性を教えてくれたと思う。売れるかどうかは分からないにしても、『オスカー・ワイルド事典』は以上のような意味でも、成功だったと考えられる。

「ニューズ・レター」もそうであるが、日本ワイルド協会の会長として、このような紙面に書くのも、これで最後となる。それで今回は勝手なことを書かせていただいた。事務局の方々だけではなく、先輩諸兄、会員のみなさま方に感謝すると共に、今後の日本ワイルド協会の発展を心から願うものである。



目 次

巻 頭 言	山 田 勝	1
第18回夏季セミナー要旨		
特別講演 「 <i>The Decay of Lying</i> について」	川崎淳之助	4
第21回ワイルド学会要旨		
研究発表 穴としての肖像画		
—『W. H. 氏の肖像』によるメタ・ゲイ批評—	鈴木 英明	6
第19回夏季大会要旨		
講 演 「デカダンティズム研究の諸相」	佐藤 喬	8
講 演 「オスカー・ワイルドとアメリカ」	貝 嶋 崇	10
研究発表 <i>Wilde's American Lecture Tour</i>	深澤 清	12
研究発表 『秘密のないスフィンクス』に託されたこと		
—ロセッティの美女達との隙間で—	加藤 千晶	14
第22回ワイルド学会要旨		
座 談 会 『オスカー・ワイルド事典』をめぐる		
司 会	佐々木 隆	16
パネリスト	山 田 勝	16
	川崎淳之助	18
	荒井 良雄	19
	佐藤 喬	20
	玉 井 暉	21
	本城 正一	22
研究発表 ワイルドとフィリップ・シドニー		
—詩を弁護した2人の詩人—	岩永 弘人	23
研究発表 オスカー・ワイルドのアイデンティティの側面		
—アイルランドとイギリスの狭間で—	薩摩 竜郎	25
海外便り	井村 君江	27
ワイルド研究会報告	酒井 敏編	30
ワイルド書誌・講演・研究発表	千葉 剛・佐々木 隆	38
ワイルド情報	千葉 剛・佐々木 隆	39
大会記録		41
日本ワイルド協会規約		43
協会からのお知らせ		44
編集後記	木村 克彦	46